

Habitat Design



体感型ショールーム PS オランジュリ(熊本市)

ハビタットって…?

自然の中で動物たちが生息している場所のこと。仏語で住むところをHabitといいますが、大きな解釈をすれば人間も動物だから、私たちがいるこの場所もハビタットなわけです。



2022年12月8日、PS オランジュリにてトークイベント「Habitat Design」が開催されました。飼育の専門家である本田直也氏と、建築環境の専門家である齊藤雅也氏をお招きし、大盛況のPS Clubとなりました。

ピーエスと本田氏、齊藤氏との出会いは北海道の円山動物園です。齊藤氏の円山動物園オランウータンの環境改善の取り組み、本田氏が立ち上げた「本田ハビタットデザイン」の活動の話など、冒頭から興味深い話が次々と展開され、皆ぐんぐんと引き込まれました。イベントの内容を一部抜粋してお届けします。

一人称/二人称/三人称的関わり

本田 飼育員が動物とどのような関係性にあるかですが、心理学者のヴァスデヴィ・レディ教授が提唱した概念に一人称/二人称/三人称的関わりというのがあります。

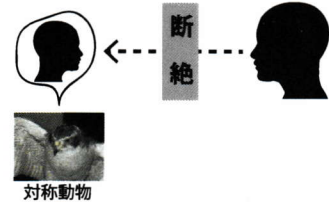
一人称的関わりというのは、対象動物と「私」が同じような思いや感情を持っている、いわゆる擬人化です。自分だったらどうなるのか、という考え方。

二人称的関わりは少し違って、対象と自分を切り離さずに、個人的関係があるものとして親密に考える。要するに、相手の立場を尊重して、相手の内面に入って、相手と同じような状態になって物事を理解する。これができるのが飼育員だけなんです。恐らく、動物園に来る普通のお客さんは、一人称的な視点ですね。

三人称的関わり完全に科学者の視点で、客観的視点になるということです。

二人称的関わりのように動物と一体化しないと、動物のことは全然理解できません。科学者が三人称的にものを見ても、動物のことは全く理解できないんです。

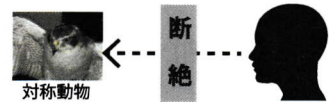
1人称的関わり



2人称的関わり



3人称的関わり



ストレスのデザインが重要?!

本田 動物の為に目に見えない「環境」をつくるには、先程の話の二人称が必要で、動物にどっぷり浸からないと、浮き彫りにならない。例えばカバは、40年劣悪な環境で飼っても普通に生きます。人間も劣悪な環境でそうそう簡単に死なない。僕らの視点から環境デザインをつくっていくと、質の悪いものになってしまいます。だから、より下の動物や植物の視点から動物の環境をつくっていく。カバの環境をつくるときは、カバが暮らしている環境の中の一番弱い存在に視点を合わせて、そこからデザインしていくんです。そうしたら質の良い環境がどんどん出てくる。僕らがデザインしているのは『ストレス』というべきものです。ストレスというと、悪いものだけみたいな印象がありますが、決してそうではなくて、良いストレスもある。刺激が全てストレスです。動物園の環境はノンストレスで刺激が全くない。野生では常に刺激=生きるか死ぬかのストレスがあり、異常行動が出る暇もない。飼育下において、目に見えない環境・目に見える環境を駆使して、どういう刺激・ストレスのデザインをしていくかが我々の役割です。



本田直也氏

円山動物園客員研究員
本田ハビタットデザイン株式会社
代表取締役

齊藤雅也氏

札幌市立大学大学院デザイン
研究科 研究科長・教授

一般社団法人野生生物生息域外保全センター代表理事

ps-group.co.jp

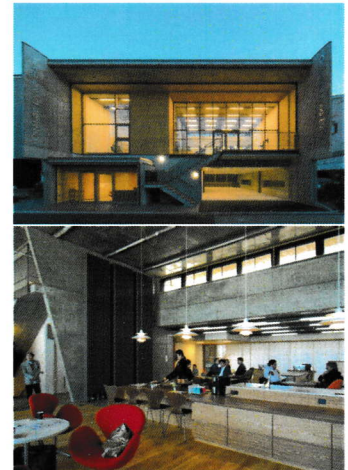
複写・公表・付与・配布利用を固く禁じます。2024.04

選択には「放射」が適している

齊藤 本田さんとやる中で「弱者の目線で」というのがありました。私自身は5年前に福井県で、ピーエスさんとコラボした在宅医療の拠点を作りました。本田さんの言葉を借りると、「どのようにゆるやかな刺激を作っていけるか」ということを考えました。刺激のデザインというのは私たちの間で共通のものなのですね。24時間、365日が同じ状態になるということはまずないし、そこに対して室内にどのようにリズムのデザインをつくるかということです。

これはコンクリートの建物で、在宅医療のオフィス。この院長に、円山動物園のオランウータンとか、爬虫類館みたいな感じに作ってほしいと言われてたんですよ(笑)。先生とスタッフの人たちと、色々な議論をしながらやりました。4mの高さのHR-Cを入れて、夏は冷水、冬は温水を流します。ここが実は、刺激の一番の熱源になる。夏は冷源であり、冬は温源になる。

冷水パネルの近くは、外から帰ってきてひんやりしたい人に好まれます。一日経理をやっている人は、しっかり安定した、刺激といえどもあまりないかもしれないけど、そういう場所にいる。福井の人たちが、福井の気候に対して、自分に適した空間を人それぞれの状態に合わせて、自身の居場所を決め調整しながらやっているということです。

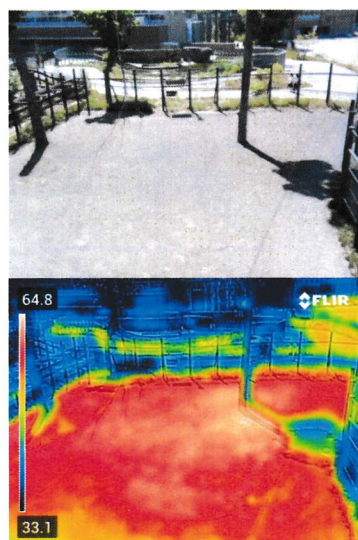


キリンが教えてくれる、放射の環境のここちよさ

本田 これ(右写真)が円山動物園のキリンの獣舎だったんですが、キリンの調子が悪かったので表面温度を測ってみると、札幌の午前中で60℃位あった。具合悪くなるわけですね。そこに樹木があるだけで、一気に熱が下がります。樹木は葉っぱで日差しを抑えてくれて、冬は葉が落ちるので、冬の日差しを入れてくれる。そういう有機的な動きをしてくれるので、樹木をつかうというのはとても良いんですね。そこが植物視点の一つの特徴です。

屋内デザインというのは本当に難しく、設計の方は「何℃何%にしたいんですか」と聞かれます。計算しないと設備が決められない。でも僕は、「日中は25℃だけけど夜は18℃まで下げたい」「湿度は昼は60%まで下げて夜は80%まで上げたい」みたいなことを言う。そうしたらもうパニックになってしまいます。動物に何が必要かというところ、この空間の中での選択肢が必要。先ほどの病院の施設も、人間が主体的に動いて、心地よい場所を選択しているわけです。動物も一緒に、自らが決めて、自らが心地よい場所を選択すること。その選択肢をいかに増やせるか。だから、まばらじゃないといけないし、ムラがないといけないんです。

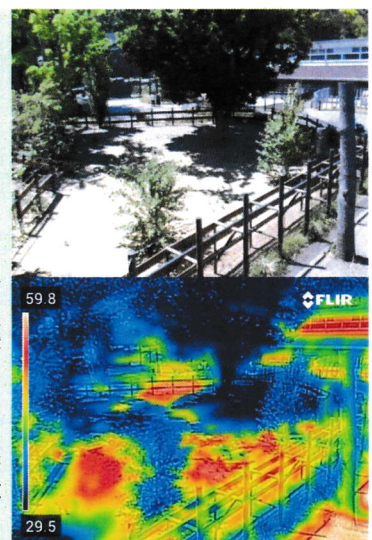
皆さんは普段、放射の暖房をあまり体感していないかもしれませんが。通常、空気を介するエアコンです。これだと動物は適切に飼えないんです。



サーモグラフィで見る円山動物園キリン舎

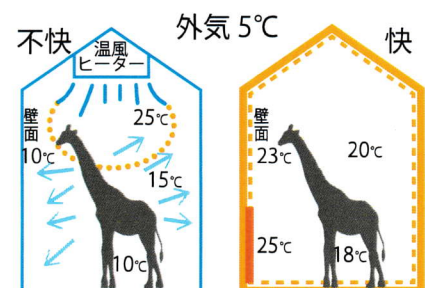
札幌でも床面が60℃に。キリンの調子が悪くなる様な状況

木陰をつくる▶と床面温度がグッと抑えられることがよく分かる



いんです。空気を介して温風とか冷風を吹くタイプは、非常に動物には良くない。エアコンだと、止めたらずぐ寒くなるし、入れたら暑くなる。特に大変なのは、キリン。キリンは大きいので、上下で部屋の温度差がものすごく出てしまう。これを温風暖房で温めると、顔の近くは強い温風に吹かれて熱くて乾燥してるけど、足元はすごく冷たい。エアコンにサーモがついているので、いきなり温風に吹かれたり、止まって寒くなったたりして、キリンが可哀想です。

放射だと、天井面や壁面をちゃんとしっかり暖めるので、キリンにとっても良い環境を再現できる。



対談の後には、活発な質疑応答が交わされました。会場が大変盛り上がるなか、時間の関係で惜しまれつつお開きとなりました。



ピーエスグループ

北海道 | 盛岡 | 仙台 | 新潟 | 東京
長野 | 名古屋 | 大阪 | 福岡 | 熊本

ps-group.co.jp

謄写・公表・付与・配布利用を固く禁じます。2024.04